

NJ素流協 News

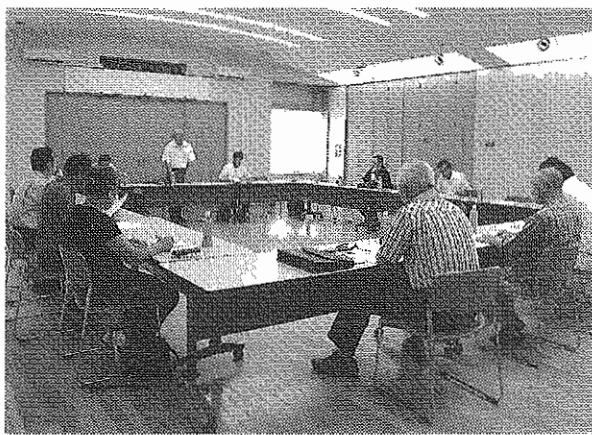
平成23年 9月30日
第81号

平成23年 9月30日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

平成23年度地区別組合員会議を開催しました

去る9月12日(月)から20日(火)にかけて、岩手県と青森県において、平成23年度組合員会議を開催した(開催日時、場所、参加人数は表1の通り)。

東日本大震災後の取組方向が見えてきてからの会合であり、協議と質疑応答は木材需給の現状と見通しを中心に進められた。各協議項目の内容は次の通り。



1. 大震災後の木材需給動向と

NJ素流協の対応方向

宮古市のホクヨー・プライウッド(株)は8月から納入がスタートしたが、稼動状況は2割程度である。丸太在庫が過剰になったため9月は一時的に納入停止となっている。10月以降は1組合員当たり1台程度の納入になると予想される。

大船渡市の北日本プライウッド(株)から流失した丸太は、回収・仕分けをし、宮古、秋田の系列工場へ搬送している。被害状況が大きく、再開までは時間を要する。

秋田プライウッド(株)は震災後協力的に丸太の受入れをしてきていたが、在庫が増加したこと、秋田県内からの受入れとのバランスをとる必要から、現在他県からの納入量は減少している。

(㈱)川井林業栗石工場は比較的安定的に納入が可能である。

表1 平成23年度地区別組合員会議開催状況

区分	日時	場所	参加事業体数	参加人数
県南・沿岸地区	9月12日(月)	遠野市森林総合センター	17	17
県央地区	9月14日(水)	盛岡市都南公民館(キャラホール)	18	20
県北地区	9月16日(金)	二戸市シビックセンター	10	10
青森地区	9月20日(火)	七戸町中央公民館	9	11

石巻市セイホク(株)は被災したものの8月から一部製造ラインが稼動したため丸太受入れを再開した。

鳥取県の日新林業(株)向けには、青森県八戸港で集荷、船による輸送を行っている。西日本地域の市況等によっては納入が不安定になることもある。放射能問題については、出荷先の要望に従い、第三

者機関に依頼し証明書を取って出荷している。

2. 組合からの情報提供

▽養殖イカダ用丸太の納入について

岩手県森林組合連合会を通じて岩手県漁業協同組合連合会に養殖イカダ用の丸太を納入するため、組合員へ生産可能量の照会を行うこととしている。イカダ用丸太は各漁協ごとに規格が異なること、原木伐採時期が10月上旬から3月上旬に限定されることなどの特殊事情があるが、素流協として協力する方向で動いている。

▽流通コスト支援事業（国庫金による運賃助成）について

素流協組合員からの補助金交付要望量は当初、材積で合計102,200m³に上ったが、県を通じて林野庁と折衝の結果、素流協組合員には合計51,900m³、99百万円の補助金が交付されることに決定し、43名の組合員が申請を行っている。運賃単価を示す証拠書類等を完備すること、納入先工場、

運搬量等が変更になる場合には振興局との変更協議が必要になることなどを説明した。

▽経営技術研修会の開催について

今年度は9月から2月にかけて、作業道開設技術（初級）及び合理的伐採技術（以上実技）、森林経営計画、木材流通の現状及び木材の評価（講座）、列状間伐技術と伐採の作業仕組み（優良事例視察）の研修を行うこととしている。

▽フォレスト再生モデル実証事業について

昨年度は6組合員の事業地7箇所においてスギ1・51ha、カラマツ5・00haの再造林を行った。今年度も引き続き10箇所、合計10haで実施する予定である。具体的実施内容は、前年の内容を分析・検討して決定し、組合員に案内する。

▽森林経営計画と森林管理・環境保全直接支払制度について

「森林・林業再生プラン」を受けた森林法の一部改正により森林

計画制度の見直しが行われた。従前の造林や間伐等の補助金は、今年度を移行期間として今後森林管理・環境保全直接支払制度に移管される。直接支払制度のうち、森

林整備地域活動支援交付金は搬出間伐等の対象地に係る立木調査等の活動を対象として交付され、森林環境保全直接支払事業は森林経営計画を受けた森林での地拵え、植栽、除間伐等に対し交付される。

新しい森林経営計画は、山主に加えて森林経営の受託者も作成でき、面的なまとまりでの森林経営を行うことを旨としている。従前の森林施業計画と森林経営計画の概要の違いを表2に示す。

3. 組合員からの要望事項と情報交換

質疑応答やアンケートの回答内容によると、多くの組合員から「震災後の木材需給動向がよく分かった。今後も情報提供を続けて欲しい」という感想や要望が寄せられた。養殖イカダについては県南、沿岸、県央地区のスギ林地帯の組

合員の関心が高かった。流通コスト支援に取り組んでいる組合員からは、納入先についての質問が寄せられた。経営技術研修会、森林経営計画の各項目には多くの組合員が関心を寄せ、活発な質疑が行われた。また各地区ならではの情報提供も行われた。

表2 森林施業計画と森林経営計画の違い

区分	森林施業計画	森林経営計画
作成者	森林所有者等	森林所有者、森林経営の受託者
種類と対象森林	属地計画（一定の時間距離の範囲以内、30ha以上）	属地計画（所有している全ての森林で、林班または連担林班の面積の1/2以上） 属人計画（所有または経営受託したすべての森林、100ha以上）
計画事項	森林施業の長期方針、森林施業の共同化	森林経営の長期方針、作業路網の整備、森林保護、森林経営受託の規模拡大目標

一葉 樹木の気象害(3)

風害

強風による倒伏(写真1)、枝折れ(写真2)などの被害である。多くは台風に伴う強風によって起こるが、竜巻によって比較的狭い地域で発生する場合もある。

① 街路樹・公園などの被害

道路や公園などで発生する被害は、樹木そのものよりも、人や建物あるいは交通に対する影響が大きく取り扱われることが多い。

発生原因は強風に加えて人為によって樹木のバランスが崩れている例が大部分である。たとえば、極めて狭い植穴で根が萎縮している街路樹、工事に伴って片側の根が切断された庭園木、根元が踏み固められて根が衰弱している大木、根の腐朽が拡大して幹が空洞になっている観光地の樹木(写真3)など、ほとんどが人為によるものである。

② 林地での被害

健全な状態の林地で風害が発生することはほとんど無いが、特に大型の台風や竜巻によっては集団

的な被害が発生することがある。

昭和29年の洞爺丸台風によって北海道で大規模な風倒被害が発生し、この被害木処理のために木材産業が立ち上がったことで知られている。

岩手県内でも、昭和56年の15号

台風では、各地のキリ植栽地(写真4)やクルミ園で被害が発生した。スギやアカマツ造林地でも被害が発生することがあるが、多くは竜巻が原因と思われる限定した地域の被害である(写真4)。

昭和36年の三陸大火の折には火災に伴う強風によって大木が倒伏した記録(写真5)もある。

③ 被害木の利用

被害木の強度性能は、カラマツではほとんど影響がないことが分かっている。一方、スギやトドマツでは、繰り返し返される曲げ応力によって、組織の破壊「もめ」が生じる。また、岩手県内では、スギに年輪に沿って組織が剥離する所謂「目まわり」(写真6)が生じている例があった。

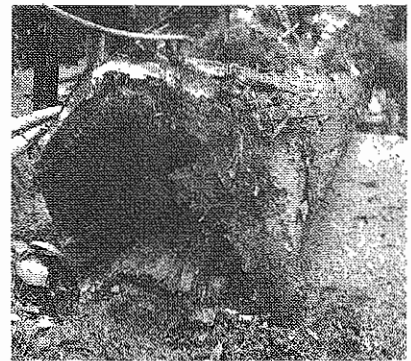


写真3 倒伏したスギ巨木の幹が空洞になっている

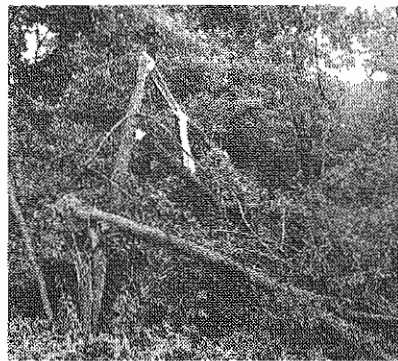


写真2 枝折れした広葉樹オニグルミ



写真1 倒伏した広葉樹エゾヤマザクラ



写真6 スギの目まわり年輪に沿った剥離



写真5 倒伏したアカマツ山火事に伴う強風



写真4 幹折れしたキリ

森林内での放射性物質の分布・移行状況及び除染

この度、文部科学省と農林水産省から、福島原発事故による森林内における放射性物質の分布状況や移行状況の調査結果及び森林内の除染の実証試験結果が公表された。公表概要の一部を紹介する。

1 森林内の放射性物質の分布・移行状況

(1) 調査林分
調査林分は、事故原発から40〜50 km 離れている福島県川俣町地区のスギ壮齢林(40〜50年生)、スギ

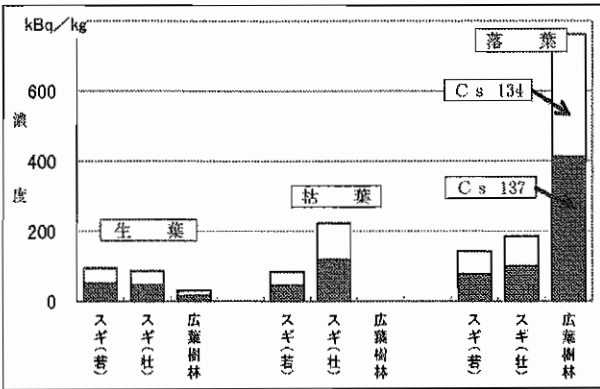


図1 葉の種類別放射性セシウム濃度

若齢林(18年生)、落葉広葉樹林の3林分である。

(2) 森林内の放射性物質の濃度
ア、葉

3林分において、生葉、枯葉、落葉を高さ別に採取して、放射性セシウムの濃度を測定している。

生葉では、スギの若齢林、壮齢林が同程度で、広葉樹林が小さくなっている。

枯葉では、スギ壮齢林が若齢林の約2倍の濃度となっている。

また、落葉では、スギ壮齢林が若齢林より若干高くなっているが、広葉樹林はスギ林の5〜6倍の濃度となっている。

イ、土壌・落葉層

地表の落葉層と土壌の深さ10 cm まで(0.5 cm 単位)の放射性セシウム濃度を測定している。

落葉層や土壌中のセシウム量は、スギ壮齢林が最も多く、若齢林の1.9倍、広葉樹林の1.3倍となっている。

更に、スギ若齢林と広葉樹林では、これらの量の約90%が落葉層

表1 土壌、落葉層の放射性セシウム

項目	林分	Cs137	Cs134
存在量 kBq/m ²	スギ林	若齢林	260
		壮齢林	490
	広葉樹林	388	323
落葉層に 存在する 比率(%)	スギ林	若齢林	89.7
		壮齢林	47.5
	広葉樹林	90.6	90.9

に存在し、土壌中はずかとなっているが、スギ壮齢林では落葉層と土壌中に半々程度存在している。

なお、土壌中ではいずれの林分ともに深さ3 cm 以下の土壌はゼロに近い値となっている。

(3) 森林内・外での空間線量率
高さ別に空間線量率を測定した。

森林の外では、地表に近い程高く、高さが高くなるほど減少傾向にある。

一方、森林内では、広葉樹林では地表に近いほど空間線量率が高く、ある高さで一定になる傾向がある。

また、スギ林では、壮齢林、若齢林ともに樹冠層に近いほど線量

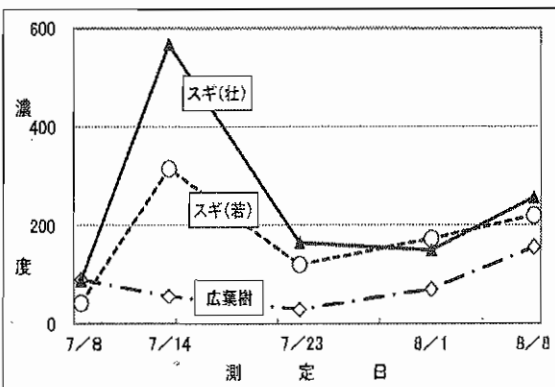


図2 林内雨の濃度

各林分ともに、採取器の設置簡定した。

7月上旬〜8月上旬の5週間測

定値に一定の傾向は認められない。また、後述する林内雨や樹幹流に比べて非常に低い濃度となっている。

イ、林内雨
7月中旬〜8月上旬の3週間、2地点において測定しており、測定値に一定の傾向は認められない。

(4) 降雨中の放射性物質の濃度
森林内・外を降下する雨に含まれる放射性セシウムの濃度を、採取器を数か所に設置して降雨を溜め、1週間毎に採取して測定した。

率が高くなっている。

所によって濃度に差があるが、採取時期による濃度推移には一定の傾向がある。スギ若齢林とスギ壮齢林は似た推移傾向となっているが、スギ林と広葉樹林とは異なっている。

また、林分毎の全体の平均値は広葉樹が最小で、スギ若齢林は広葉樹林の約2倍、スギ壮齢林は約3倍の濃度となっている。

ウ、樹幹流

葉や枝で受け止められた雨が幹を伝って流下する樹幹流を各林分3本の立木に貯留タンクを取り付けて7月と8月に1週間から10日間集めた。その樹幹流の濃度を測定した。

各林分の樹幹流の濃度は、時期別に同様の傾向を示し、広葉樹林が最も小さく、次いで、スギ若齢林、スギ壮齢林となっている。

なお、樹幹流と前述の林内雨の濃度を比較すると、各林分とも林内雨が樹幹流の約2倍前後の濃度となっている。

エ、降雨量と濃度

およそ1週間ごとの総降雨量と濃度の関係を調べると、各林分とも降雨量が多いほど、濃度が低くなる傾向がある。

表2 樹幹流の濃度 単位: Bq/kg

林分	採取期	樹幹流	林内雨
広葉樹林	7月	38.7	28.7
	8月	60.3	155.4
スギ林(若)	7月	58.3	120.0
	8月	88.7	220.0
スギ林(壮)	7月	63.6	164.4
	8月	152.9	256.0

採取期間: 樹幹流 7月7.3~7.23 8月8.12~8.19
林内雨 7月7.14~7.23 8月8.6~8.12

また、林内雨に含まれる放射性セシウムの総量は、降雨量によって大きく変化しない傾向が確認された。

2 森林での除染実証試験

(1) 試験地と試験方法

事故原発から約80 km離れている福島県逢瀬町のスギ・ヒノキ林において、中腹に調査点を設定し、下草と落葉の除去範囲を1 m × 1 m、2 m × 2 m、4 m × 4 m、と段階的に広げながら、調査点の空間線量率を測定した。

(2) 試験結果

除去範囲を拡大するに従って、中心部の空間線量率は減少しており、その結果から落葉等の除去による空間線量率の低減効果をシミュレートすると、森林のタイプにも

よるが、除去範囲が20 mを超える除染の効果が低減することが判った。

このことから、落葉等の除去は林縁から20 m程度の範囲で行うことが効果的、効率的であると考えられる。

林業経営技術研修

「森林作業道オペレーター養成研修」

レクター養成研修

平成23年度林業経営技術研修の第1回として去る9月26日〜30日「森林作業道作設オペレーター養成研修」を実施しました。

今回の研修は、林野庁の助成事業として実施している一般社団法人フオレストサーベイのOJT研修(職場内研修)を活用して実施したものです。

受講生は、組合員の後継者等の4名であり、実技研修として適切な人数で、実のある研修となりました。

遠野市を会場として行い、実習場所は遠野市土淵町のカラマツ林で、バックホウでの法切や法尻の締固め、伐根方法などを丸々3日間実施しました。



最初はおぼつかない作業技術でしたが、講師の上級指導員西間薫氏からの手足をとっての指導により、全員が作業道作設の基本的技術をマスターして研修を終了しました。

今後、研修生はそれぞれの作業現場へ帰って行き、低コストで丈夫な作業道を開設し、研修成果としての生産性の向上や伐出経費の低減が期待されます。

研修生名簿

No.	氏名	所属先
1	下久保 仁志	(株)下久保林業
2	小野寺 俊祐	小野寺隆治
3	佐藤 勝昭	佐藤木材
4	外山 茂	(株)昭林

作業道散策

18

ケンポナシ(玄圃梨)

樹高は20m近くになり、北海道から九州まで自生するが、数は少ない。

この木の特徴は、実が写真1のように根生姜かトコロの根のような変な形をしている。種子は黒い丸い部分に入っており、褐色の変な形をした部分は花の柄だったところであるが、この部分が食べられる。とても甘く梨のような良い香りあるのでこの名がつけられた。盛岡市の岩手公園広場のそばに

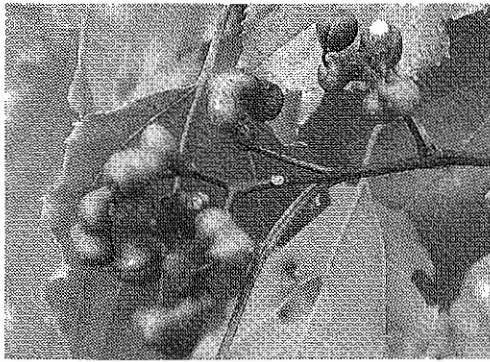


写真1 ケンポナシの実 黒い部分に種が入っている



写真2 ケンポナシの花

大木3本があるが、スナック菓子など手に入らない当時、子供たちが競って落ちた実を食べた。今でも秋になると沢山の実が落ちていくが、時折年配者が懐かしそうに拾っている程度である。岩手県で、あまちや、あまざ、あまがせ、けんぶなしなどの地方名がある。この花の蜂蜜は最高級品であり、幹も高級家具材として利用される。樹皮はケンポナシ茶として高価に取引されている。実の成分は口臭消しの効果があり、ロッセフラボノガムの成分表にも記録されている。

中国では、この実を入れるとお酒が水に変わってしまうとも言われ、悪酔いを直す、酒臭さを消すなどとも言われ、現在も薬草とされているそうである。

この実は動物たちも大好きで、秋の熊の糞には沢山の光沢のある種が混じっている。本来は動物たちに種を運ばせるためにつくられたシステムだったのであろう。

冗談欄 「どうすりやいの」

今TTPなるものが議論の中心となってきた。

日本語にすると、「環太平洋戦略的経済連携協定」と訳されるもので、参加国間での輸入や輸出の際の関税を無くして貿易を自由化しようとするものである。

自動車など輸出を主とする産業は賛成、農産物や木材など輸入の多い産業界は反対という構図である。

今後の日本の方向を考えたとき、どちらに進むべきか判断に迷うところである。

ところで、税金と言えば、先日新聞に「脂肪税」のことが載っていた。太っている人はバスや電車に乗るとき席を広く取り、重いので燃料を多く必要とするからではないらしい。

脂肪分を多く含んでいる食品を食べると、成人病になり医療費が多くなるので、脂肪分を一定以上含んでいる食品に税金をかけようという親心らしい。

同様に、ポテチ税というのも塩分や糖分の多いポテトチップスなどの食品に課税しようとするものである。

更に、昭和10年代後半には「特別行為税」というものがあり、いかなる行為に課税したのかと詮索するが、写真撮影や美容、印刷製本等のようである。

また、中世ヨーロッパには「死亡税」というものもあったらしい。土地を領主から借りて耕作している農民は死亡すると、土地を領主にかえさなければならず、妻子が路頭に迷うことになる。そこで、後継者が領主の死亡税なるものを払って耕作を継続したそうである。

また、「人頭税」なるものは住んでいる住民の人数に応じて課税するもので、日本でも琉球王朝時代にあったそうである。

更に、領外婚姻税は、女性が領土外へ嫁いだ場合に持ち出した財産に課税したもので、主たる目的は領土民の再生産力維持と労働力が領土以外へ流出することへの課税であった。

以上、考えてみるに、何かをするのと税金、結婚して外へ出ると税金、更には生きていくだけで税金、いっそのことと死んでしまおうとまた税金。一体、どうすればよいのだろうか？

平成23年9月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約3,620m³減少、カラマツが約360m³増加、アカマツが約130m³減少し、全体では約3,400m³減少している。昨年同月と比較すると、スギが約8,310m³減少、カラマツが約5,370m³減少、アカマツは約1,390m³減少し、全体では約15,130m³減少している。なお、今月はシステム販売取扱はなかった。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は前月より約380m³増加、昨年同月より約3,000m³増加している。
- 3 今年度の年間計画量に対する1か月あたりの出荷量の割合（目標達成率）を50%とすると、今月の全体出荷実績は、計画数量を18.5ポイント下回る進捗状況となっている。

樹種	長級 (m)	販売先				計	今年度累計			
		合板用			その他		合板用	その他	計	
		ホクヨー プライウ ッド(株)	北日本 プライウ ッド(株)	その他						樹種別割合 (%)
スギ	2.0			1,244	1,244		13,854			
	4.0			1,100	1,100		7,613			
	計			2,343	2,343	3,259	(863) 21,467	59.2	(173) 22,102	(1,036) 45,569
カラマツ	2.0			1,578	1,578		10,644			
	4.0			355	355		2,586			
	計			1,933	1,933	416	(95) 13,231	36.5	(149) 6,693	(244) 19,924
アカマツ	2.0						270			
	4.0			551	551		1,245			
	計			551	551	247	(0) 1,516	4.2	(0) 3,144	(0) 4,660
その他針							21	0.1	673	695
広葉樹							0	0.0	458	458
合計				4,827	4,827	4,668	(958) 36,235	100.0	(322) 33,072	(1,280) 69,306
目標達成率(%)										31.5
計画量										220,000
バイオマス用針葉樹チップ材 (単位: トン)										
バイオマス用針葉樹チップ材 (単位: トン)										

バイオマス用針葉樹チップ材 (単位: トン)

長級2.0には2.1を含む、() はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

このところ毎号の「落穂拾い」で取り上げる話題の内容が、最近のわが国の混乱・低迷著しい国情とそれに適切に対応できない政府や政治家の有様を慨嘆するといった、一見後向きで堅苦しいものに偏っていたので、時あたかも秋到来、落穂拾いも少しは詩情を持ち合わせているところを誇示？したい。

「秋風の いたりいたらぬ 袖あらじ ただわれからの 露の夕暮れ」

「新古今和歌集」に載っている鴨長明(『方丈記』の作者)の作であるが、歌の意味は、蛇足ながら、(夕暮れになって、人によってその袖に秋風が吹いてきたり来なかつたりという違いはないだろうに、わが袖だけが露(涙)に濡れている。それは、わたしの自身の心のせいなのです。)というところか。長明の多感な感受性が、物悲しい秋の移り変わりに触発されて思わず涙したのであろう。落穂拾い子のよるな鈍感な人間には、秋が来ても涙することはなく、それでもそこはかとなく長明の心情が分かるような気がするのがある。そしてこの東北の地では周囲の山々を華やかに彩る紅・黄葉もほんの一瞬で過ぎ去り、厳しい寒さの白い世界を迎えるのである。もう一首、

「見わたせば 花ももみじも なかりけり 浦のとま屋の 秋の夕暮」

これも「新古今和歌集」にあり、歌聖と呼ばれている藤原定家の詠んだ歌である。

冬も真近かな晩秋のうら寂しい夕暮の情景が目につくような歌である。(見渡すと、春の花はもろろんのこと、秋の紅葉さえ、何一つない。苔屋(とまや) (スゲやカヤで屋根をふいた粗末な小屋) が建つ、この浦の夕暮は) という意味になるが、作者の感性がなせる歌であると同時に、この歌は後の茶の湯(茶道)にも大きな影響を与えているという。茶道の創始者とも讃えられている千利休が記した『南方録』の中で、利休の師、武野紹鷗が「わび茶の湯の心はこの歌の心こそあれ」と言っていて、「花や紅葉を見尽くしてこそ、苔屋のさびきつた境地を見いだすことができる」というのである。このあとに利休がもう一首挙げたのが

「花のみ 待つらん人に 山里の 雪間の草の 春を見せばや」

で、藤原家隆の和歌である。意味は、(花の季節ばかりを待つ人に、山里の雪の間から芽を出した草の春を見せたいものです) というところだろう。

東日本大震災が発生してから7か月を経過した。被災者や関係者の皆様は、衣食住を含めたあらゆる面での生活再建にご苦労をなさっておられるが、これからは寒い冬期に向かうのだから、生活環境はますます厳しくなる。月並みな言葉になるが、「お身体に気をつけて頑張ってください」。

厳しい冬を過ごした先には、先に挙げた藤原家隆の歌にあった「雪間の草の春を見せばや」の季節が待っている。